

「森銑三刈谷の会」だより No. 22

発行 2023/7/15 (月刊・メールでの投稿歓迎)

例会 第3土曜日 14:00-16:00 市中央図書館 参加自由

バックナンバー 刈谷市中央図書館>森銑三刈谷の会

共同代表 神谷磨利子・鈴木 哲 tetsu_s@katch.ne.jp

森銑三、松岡於菟衛翁、森三郎の関係年譜					表作成 河橋育実、神谷磨利子
年	年齢(数え)			事 項	
	森銑三	松岡翁	森三郎		
1926	大正15	32歳	66歳	16歳	3月、森銑三、文部省図書館講習所(1年間)修了。
					4月、森銑三、東京帝国大学史料編纂所図書部に勤務。松岡於菟衛翁(図書部、写字生)との出会い。
1927	昭和2	33歳	67歳	17歳	森銑三、この頃、松岡於菟衛翁から大道芸のはなしを聞く。2、3日後にもう一度話し直してもらい、
1928	昭和3	34歳	68歳	18歳	筆記。於菟衛翁に校閲を依頼。
1933	昭和8	39歳	73歳	23歳	1月20日、松岡於菟衛翁、死去。
					森銑三、雑誌『今昔』2-4月号(小田原書房)に「大道芸のはなし」(署名:故松岡於菟衛)発表。
					森銑三、雑誌『今昔』5-6月号(小田原書房)に「松岡翁の手紙」発表。冒頭に「松岡於菟衛翁の『大道芸のはなし』の評判のよかつたのが嬉しい」とある。
					森三郎、『赤い鳥』7月号に「一人相撲」を発表。
1942	昭和17	48歳		32歳	8月、森三郎、小国民文芸選『かさゝぎ物語』(帝国教育会出版部)刊行。「一人相撲」所収。
1943	昭和18	49歳		33歳	9月、森銑三『月夜車』(七丈書院)刊行。付録として「大道芸のはなし」所収。

第22回(2023/6/17) 「森銑三と松岡於菟衛翁」

参加14人

河橋育実

「森三郎の作品を読む会」で、『赤い鳥』昭和8年7月号に掲載された森三郎さんの童話「一人相撲」を読んだ時に、これは銑三さんの「大道芸のはなし」の中の「独相撲」を参考に創作されていることを知りました。この「大道芸のはなし」は銑三さんが尊敬されていた松岡於菟衛翁から聞いた話をまとめたものです。

銑三さんの『思い出すことども』(中公文庫、1990年)を読んでいると、人物に付いている敬称は「さん」であったり「氏」であったり「博士」であったり「所長」等の役職名だったりします。その中で松岡於菟衛翁については、松岡翁になったりしますが終始「翁」を付けているので銑三さんの尊敬の表れだと思えます。

近世の学芸史上の人々の研究を志していた銑三さんは、史料編纂所の書庫の書物は中世以前の古文書や古記録の写しが主で、近世期の木版本の類が少ないことに失望したと言っています。編纂所の中で銑三さんは水の中に落とされた油の一滴かのように、周囲と融合しきれないでいたそうです。しかし写字生であった松岡翁から多大の啓発を得て、「後には私は、松岡翁を知るために、編纂所へはいったのだとさえも思っていた」と言っています。

今回「大道芸のはなし」に載っているいろいろな大道芸について読んでみると、「独相撲」の他に「手品の蠟燭屋」の中にも三郎さんの「一人相撲」のヒントになる話があったことが分かりました。

この「一人相撲」だけでなく、銑三さんが翻訳したラフカディオ・ハーン(小泉八雲)の話や、銑三さんの紹介した御伽草子の話からもヒントを得て、三郎さんは何か童話を創作しています。

銑三さんの会ですが弟の三郎さんのことも知ってもら

う機会かと思ひ皆さんで読み合わせをしていただきました。初見の作品を読んでくださった皆さんに感謝します。

松岡翁と刈谷との思わぬ関係

神谷磨利子

会では松岡翁についてもっと知りたいという声が出た。松岡於菟衛についてまとめて書かれている資料はないが、『森銑三著作集』正統編に散見する記事をまとめるとその姿が見えてくる。当時の編纂所には、編纂官12人、編纂官補12人、その下に嘱託以下の人々が居り、所員は百人余りであった。史学の大家、帝国大学や国学院出身者等の大勢いる中で、松岡翁は一番下の写字生という立場で黙々と仕事をしていた。松岡翁(1861-1933)は土佐の山内容堂の侍講松岡時敏、号・毅軒(きけん、1814-1877)の末子である。毅軒は明治維新後文部省に勤め、後に元老院議官になる。在任中64歳で死去した時、於菟衛は17歳であった。於菟衛に漢学の素養があり書画に精通していたのは、育った環境によるのであろう。銑三は於菟衛の家族に信頼され、遺書や遺品の整理を頼まれた。銑三の書いた「大道芸のはなし」の聞き書き原稿もこの時に見つけた。於菟衛の所持していた父・毅軒著『画苑小伝』他の書は「於菟衛翁の没後史料編纂所の蔵に帰した」(「武富圪南の書いた宮本武蔵の伝」という。

森銑三著『松本奎堂』の中に、奎堂が江戸に出て羽倉簡堂の塾で学んでいた時の事がある。典拠は岡鹿門『在臆話記』原本である。松岡毅軒は簡堂と親しく、主君容堂侯が俊抜の書生を求めた時に、簡堂に相談した。簡堂は直ちに塾頭の奎堂を推挙した。事は実現しなかったが、ここにも松岡翁と銑三、刈谷をつなぐ糸があった。

予定(8月は休会)

23:2023/7/15(土) 神谷磨利子 供養塚の二坪半の家

24:2023/9/16(土) 山田宇多子 町立刈谷図書館開館準備時代の森銑三と子どもたち